

引退した
嫌われ S級冒険者は
スローライフに浸りたいのに！

気が付いたら辺境が世界最強の村になっていました♪

2

Bitansan

微炭酸

Ⅲ.紅木春



Intai shita kiraware "S"kyuu boukensya ha
SLOW LIFE ni hitaritainoni !

ユーニヤ

ロアの後輩の冒険者。
S級冒険者になり、
ロアを捜して辺境の地へ
やってきた。

シグ

悪徳ギルド長に雇われ
ている奴隸。ギルド長には
彼の少し変わった能力が
買われていた
ようで……

ミステイア

ユズリアの師匠で
リュグ爺の弟子。過去に
相当しごかれたのか、
リュグ爺には頭が
上がらない。

・登場人物紹介・

ユズリア

歴史のある名家で
生まれた貴族令嬢。
辺境で出会ったロア
に婚約を迫る。

ロア

本編の主人公。自由な
生活を夢見ている。
困っている人は
見過ごせない
お人好し。

サナ

ロアの妹で一流の
魔法学校を首席で
卒業した。ロアに近付く
女性には強い嫌悪感
を抱く。

リュグ爺

元英雄のおじいちゃん。
辺境に住んでいる
自分より若い冒険者を
孫と呼んで
可愛がっている。

ドドリー

セイラ

コノハ

・辺境に住む仲間たち

第一章 やつぱり、スローライフはままならない

人類圏の外側——S級冒険者相当の実力者でないと辿り着けない超危険地帯にあり、魔物以外の生物にとつて有害な物質である魔素が著しく多い森——通称、魔素の森。その奥深くに存在する、ここは『聖域』。

俺——ロアは、その聖域で、スローライフを志す引退したS級冒険者だ。

ゆらゆらと微かに光を放つ大きな泉——魔力溜まりを中心に、草花が芽吹いていた。魔力溜まりには、一般に魔法の発動に使われる魔力が含まれており、これが聖域を魔素から守ってくれている。

國中の冒険者たちに嫌われながらも、父親の残した借金を返済した俺は晴れて冒険者を引退。足早に国を抜け出して、この聖域で一人平穏な生活を送る——つもりだった。

どういうわけか、聖域にS級冒険者やそれに準ずる強さの人が次々と訪れ、その度に何か厄介ごとが起る始末だ。俺の固有魔法は『固定』。対象と対象をくつ付けるだけのシンプルな魔法なのに、なぜか皆に頼られてしまう日々。

俺に結婚を迫る貴族のご令嬢であるユズリアや、同族から逃げてきた月狐族の少女のコノハ。な

ぜか、俺を追いかけて聖域まで来てしまった妹のサナに、ムキムキマッヂョエルフのドドリーとバーサーカー神官のセイラ。さらには英雄として名をはせた伝説的な冒險者のリュグ爺まで。

気が付けば、たくさん的人が住み着いた聖域は、世界最強の村になってしまっていた。

つい先日は、災厄の存在と言われる魔族が襲撃してきたが、泉の力でなんとか撃退し、ようやく安寧の日々を得ることができた。聖域の泉は、魔力が多く溶け込んだただの魔力溜まりではなく、浄化の力やまだ未発見の力を秘めた特別な泉のようだ。

とりあえず、もう何もしないでだらだらと数年は過ごすんだ。

しかし、固く誓つた俺の決意は、早々に破られることになる。

「——ロア先輩！」

聞き覚えのある、しかし聖域にいるはずのない少女の声がした。

いやいや、まさかね。そう思いつつ声のした方を見やり、俺は思わず小さなため息を零した。

少女の声が聞こえてくる少し前の出来事。

魔族の件もようやく一段落し、ついに得た安寧の日々。

怪力お嬢様ことユズリアと、人でなしマイスイートシスターのサナが、いつも如く言い争うのを横目に、俺は膝にすっぽりと収まるコノハを愛でていた。

食後の眠気に微睡むコノハの毛の生えた耳を撫でる。その度に、コノハのもふもふな尻尾がゆら

りと左右に揺れる。

「コノハ、今寝たら夜に寝れなくなるぞ。夜更かしは許しませんからね」

俺がそう言うと、コノハのくりつとした瞳が、軽いため息と共に呆れたように細くなる。

「ロア殿、某は子供じやないであります……」

そう言い張るコノハはまだ十二歳だ。十個近く年が上の俺からすれば、十分に子供。というか、紛れもなく少女だ。月狐族特有のちんまりとした体躯が、余計にそう感じさせる。

しかし、この地にいると、この地にいることは、コノハもまたS級冒險者。村や街一つを単体で壊滅できるA級指定の魔物はおろか、国仕えの兵力の魔法師団が束になつても敵わない、S級指定の魔物すらも一捻りにする実力の持ち主だ。

この若さで、世界に百人もいないS級冒險者の一角を担うのだ。将来が恐ろしい。

若いって、いいな！

ユズリアとサナは若くて分別がないからこそ、今夜はどっちが俺と寝室を共にするのかという、どうでもいいことで毎回喧嘩ができるのだ。

いつも、俺が分身の魔法でも使えたならなあ。

しかし、俺は悲しいことに地味な魔法しか使えない。才能って、理不尽だ。

わーはっはっはっは！

穏やかな時間をぶち壊す、暑つ苦しい笑い声と共に地面が振動する。

巨大な筋肉塊^{きんにくくい}が俺へと一目散に突つ込んでくる。そのオイリーな身体^{せんざん}が燐々と降り注ぐ陽射しを反射し、輝いていた。

また一つ、俺の中の純然なエルフ像が音を立てて崩れていく。

「兄弟よ！ 食後の筋トレをしようではないか！」

筋肉エルフことドドリーが俺にそう提案した。

俺は重たく息を吐き、右手の指を一本縦に振り下ろす。その動作を俺が取った瞬間、『固定』が発動する。ドドリーの左足が『固定』の効果によつて棒のように固まる。走ってきた勢いを殺せず、つんのめるドドリー。

「また、つまらぬものを固定してしまった」

誰がこんなに穏やかな屋下がりに、わざわざ筋トレなどするもんか。無様に顔面から地に伏しておけ。

どんなに強朝^{きょうしやく}で剛力^{ごうりき}な筋肉野郎だろうと、体勢を崩してしまえばこちらのもの。

そのまま、ドドリーが顔から地面に落ち——ことはなかつた。

「ふんっ！」

かけ声と共に、地面すれすれでドドリーの身体がピタツと静止した。その鍛えられた筋力を身体中に浮かび上がらせる。

「う、嘘だろ……」

俺は思わず呟く。

コイツ、片足で踏ん張りやがつた……

「おおー、ドドリー殿、まるで浮遊魔法^{ふゆまほう}のようでありまするな」

コノハが感心したように声を上げる。

確かに称賛なのだ。すごいというか、普通に怖い。わけが分からぬよ。

「兄妹も鍛えれば、簡単にできるようになるぞ！」

ドドリーがコノハにそう言う。

「本当でありまするか!?」

いや、なるわけないだろ。

これはあれば、ただの化物だ。浮遊魔法をどこかのバーサーカー神官に教えてもらつた方がよっぽど現実的だ。

「あら？ 何か不名誉な呼び名を付けられたよくな……」

刹那^{せつな}、強烈な悪寒^{おかん}が俺の背筋を駆ける。錫杖^{しゃくじやく}のシャランという音が、俺のすぐ真横で鳴り響く。

気配もなく、セイラが嫣然^{えんぜん}と笑みを携えてそこにいた。

「や、やあ……えっと、どうした？」

俺の問いかけに、セイラは何も言わない。じつと俺を見つめる。ただ、まっすぐに。

まるで蛇に睨まれた蛙の気分——いや、『固定』をかけられた魔物の気分だ。

「あ、あの……すみませんでした……」

「どうしたんですか？ 私、まだ何も言つていませんけれど」

錫杖が俺の肩をそつとなぞる。艶めかしく思えるその仕草も、俺にとつては畏怖の対象だ。

つか、絶対に心を読む魔法とか存在するわ！ だって、ほら、目の前で実証済みだし！

「これ、神官の娘や。それ以上、孫を虐^{いじ}めるでない」

しゃがれた声がどこからともなく聞こえてくる。いつの間にか、コノハにお菓子を渡すリュグ爺の姿があつた。さては、またお得意の魔法で時空を伝つてきたな。

リュグ爺の使う『時空剣』という魔法は、時空の狭間から数多^{あまた}の剣を引き出すものだ。それどころか、己も時空の狭間に飛び込んで自在に空間を行き来することができる。だから、俺に気が付かれずに近寄ることなど造作もなかつただろう。

もちろん、リュグ爺と俺の間に血の繋がりはない。孫とはわざと言つているのか、本当にボケているのか、そのよぼよぼの見た目からは判断が付かない。

ただし、リュグ爺はこの聖域において最強のS級冒険者。そして、『釘づけ』というダサい異名を持つ俺の不名誉な異名仲間として、日夜酒を交わす予定の仲だ。リュグ爺の異名、『無頼漢の王^{おう}』って、いつ聞いても絶妙にダサイ。

本人も自覚しているのか、口に出すとともに渋い顔をするのだ。

分かる、よく分かるぞ、リュグ爺。

最初は俺とユズリアだけだつた聖域が、いつの間にかこうして賑やかになつた。癖の強い来訪者に、何度も俺のスローライフは邪魔されてきたけれど、ようやく平穏な日常を得ることができたのだ。

人生って、素晴らしい！ もう、どんな厄介ことが降りかかるとも、俺は絶対に動かない！ 何かあれば、それこそ自分の身体に『固定』をかけてベッドとくつ付いてやる。

もう、誰にも俺のスローライフは邪魔させない！ さあ、来るなら来やがれ！ 対戦よろしくお願ひします！

「——口ア先輩！」

おや、可愛らしい少女の声がするな。

「おい、コノハ。今、俺のことを先輩つて呼んだか？」

ふふつ、愛^いい奴め。

そんなに俺のことを尊敬しているのか？ そうか、そうか。今日はサナともユズリアとも寝ん！

俺はコノハと寝るぞ！ 枕元で俺の冒険譚の子守歌を唄つてやるんだ。

「あの……某、何も言つてないであります」

「そんなわけないだろ？ コノハ以外にこんな可愛い声はここじゃ考えられないぞ」

そうだとも、セイラは年上お姉さんボイスだし、サナはお兄呼び、ユズリアだって俺のことを先輩だなんて呼ばないさ。

——ん？ 先輩？

思考を巡らせる。はて、そんな呼び方をする奴は一人しか思い当たらないんだが……いや、でもあいつは……

「ロアー！ あんたにお客さんよー！」

ユズリアの言葉にたらりと汗が頬を伝う。

なるほど、これは問題ありだ。大ありだ。

これまでに厄介な問題ごとを抱えてやつてきた人たちのことを思い返しながら、俺はため息と共に振り返る。

「やつぱり……」

そこに立っていた少女は栗色の長い髪を揺らし、あどけないくりつとした紅茶色の瞳で俺をまつすぐ捉えていた。その傍らには、背丈より大きな魔法杖^{まほうづえ}。ぶかぶかのローブと大きな魔法帽子は昔に俺が買つてやつたものだ。

「ようやく、会えましたね」

心底嬉しそうに満面の笑みを浮かべる少女。

「ユーニヤ、どうしてここに……!?」

やつぱり、俺のスローライフはまだ始まりそういうもない。

スローライフ——生活様式の一種。効率などを重視するのではなく、丁寧に、のんびりと過ごしながら、人生や生活の質を高める生き方のこと。

よし、この文言を今度大量の立て看板にして魔素の森全域に『固定』しまくつてやろう。

「ロア先輩ー！」

やつてきた少女——ユーニヤは大きな杖を両手で抱えながら、俺のもとへ駆け寄つてくる。そして、その子猫のように母性をくすぐる上目遣いで俺を見つめた。

なるほどね。

「会いたかったです！」

にぱーっ！ と天真爛漫な笑みを浮かべながらそう言うユーニヤ。

なるほど、なるほど。

「ロア先輩、ちょっと変わりました？ なんでしょう……その」

ユーニヤは頬を軽く染め、もじもじと手元で杖を転がす。

おっ？ おっ？

「——か、かつこよくなりました……よね？」

つづうつづうつづうつづうつづう。



思わず音を立てて大きく息を吸つた俺は、皆をぐるつと眺め、早口で告げる。

「俺、この聖域を出てユーニヤと二人で暮らすから。じゃ、達者でな！」

ユーニヤの手を取り、貴族顔負けの優美な所作で彼女の身体を俺の方に引き寄せる。
相変わらず小柄で、吹けば飛んでしまいそうなくらい軽い。これは、俺がつきつきりで守つてあげなくちゃな。なんせ、ここはS級指定の超危険地帯。魔族だつて出るほどの場所だから、そういうのは当然だろう？

「あ、あの、ロア先輩!?

あわあわと顔を紅潮させるユーニヤ。

おつと、照れた顔も可愛いじゃないか。

「さあ、行くよ。でも、その前に父さんと母さんの墓参りだけさせておくれ。そうだ、ユーニヤもついてきて両親への挨拶も済ませてしまおうじゃ——」

メキッ！ と右わき腹が悲鳴を上げる。そこに突き刺さった小さな肘が、風を纏い、すさまじい

威力で俺を吹き飛ばす。

俺は背中から地面に叩き付けられ、長い距離を転がる。

えっ？ 俺の胴体繫がつてる!? 大丈夫だよね!?

そう思わずざるを得ないほどの痛みを腹部に感じた。

こんなことをするのは、一体ユズリアとサナのどっちだ?

つたく、俺じやなかつたら内臓ぶち

15 引退した嫌われS級冒險者はスローライフに浸りたいのに！2
気が付いたら辺境が世界最強の村になっていました

まけて死んでるぞ。

「あらあら、コノハさん。ロアさんの身体が曲がつてはいけない方向に曲がっちゃつてるじゃないですか」

ん？ セイラが何か不穏なことを言つたよな。^{ふおん}

……えつ？ 本当に俺生きてるよね？

幽体離脱とかしちゃつてないよね！？

俺がそう思つたのも束の間、身体を温かな光が包み込む。すると、スーツと全身の痛みが引いていく。セイラが回復魔法をかけてくれたのだろう。

なんというか、いつの間にか理不尽な攻撃を受けることに慣れてきている自分がいる。悲しい話だ……いや、待て。というか、誰が俺を殴つたって？

俺は恐る恐る、身体を起こす。良かつた、五体満足だ。

ユズリアとサナに目を向ける。本當だ、彼女たちは冷ややかな目を俺に向けているが、特に何もしていない様子。つまり、俺を殺しにかかった張本人はそこで札^{あた}を輝かせるコノハだ。

「某、自分の座^{ポジション}を奪われる気配がしたであります」

コノハはじろつとユーニャを見る。しかし、当のユーニャは首を傾げるだけ。

まあ、確かに属性的には被つているかもしれないが……というか、それは俺をぶん殴る理由になつてゐるのか？ いや、なつていない！

珍しい。コノハがやらなかつたら、私がやつてた。ぐつじょぶ」「

おつと、実の妹から聞き捨てならない台詞が。

「あっ！ サナさん！ 会いたかつたです！」

ユーニャがサナを見て、嬉しそうに顔を輝かせる。

「うん、久しぶり。ユーニャも元気そうで良かつた」

どうやら、俺の知らないところで二人には繫がりがあつたらしい。二人とも人見知りというか、他者と関わりをつくりたがらないタイプだから意外だ。

仲睦^{なかむつ}まじく会話をする二人を見て、俺は思わずちょっぴり嬉し泣きしそうになつた。まだわき腹が痛い気がするけど。

彼女たちのことをよく知つてゐるからこそ、こんな親みたいな気持ちになつてしまふのだろう。

本当、涙が出てきそうだ……わき腹の痛みで。

「なんということだ、また孫が増えた……嬉しいのぉ、嬉しいのぉ」

祖父目線で本当に泣いてる人も隣にいました。

あれ？ つてか来訪者はまた年下か……俺が待ち望んでいるお姉さんはどこに……

そう思いながらも、俺はユーニャの背を押して皆の前へと立たせる。

「とりあえず、皆に紹介するよ。彼女はユーニャ。俺が冒險者をやつていた時の数少ない知り合いだ」

この紹介の仕方はどうなんだろか、と思わなくもない。でも、事実だから仕方がない。俺が皆

に自信を持つて知人だと紹介できるのはユーニヤくらいなもんだ。

「皆さん、初めまして。駆け出しのS級冒険者ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひします」

そう全員に向けて前置き、その後、ユーニヤは一人ずつ丁寧に声をかけて回った。

時間の問題かと思つていたけれど、ユーニヤもついにS級になつたんだな。

ユーニヤの強さは俺が良く知つてゐる。足りなかつたのは実績だけだ。だから、なんら驚くことはない。しかし、俺が街を出る前に約束したとはいえ、S級になつて速攻で会いに来るかね、普通。

「うむ、兄弟の知り合いとは思えぬほど、しつかりとした娘ではないか！」

「おいでドリー、それはどういう意味だ」

しかし、言われてみればそうかもしれない。

ユーニヤは街の人気者だつた。打算のない性格と、しつかりとした人間性。庇護欲をそそる見目も相まって、女性だと舐められがちな冒険者の社会でも受け入れられていた。

そんなユーニヤが、一番慕つていた冒険者が嫌われものの俺というのは、確かにおかしな話だ。「えつ、サナさんつて、ロア先輩のご兄妹だつたんですか!?」

「うん、そう。お兄は私がいないと生きていけない。だから、私もここに住んでいる」

ユーニヤの質問に、サナがなぜか得意げに胸を張る。

「なんだ、ユーニヤ知らなかつたのか」

俺の問いかけに、ユーニヤが頷く。

「はい、サナさんはパンプフォール国で偶然お会いして、少しの間でしたが仲良くさせてもらつていたんです。でも、そうですか、ロア先輩がサナさんのお兄さん……なるほどですねえ」

含みを持った笑みで俺をまじまじと見るユーニヤ。一体、どうしたというのだろうか。

「ユーニヤ、余計なこと言つちや駄目」

そう言うサナは無表情だ。しかし、兄には分かる。あれはとても焦つている時の無表情だ。

「どうしてですか？ いつも私に話してくれたじゃないですか。私のお兄は世界で一番カッコいい——」

俺の眼前で星々が瞬いた。

なるほど……まあ、一応服と全身を『固定』。

サナの魔法——『アステリス天体魔法』によつて彼女の拳が光り輝き、俺の腹部に突き刺さつてピタツと止まる。それを見て、サナがぼつりと呟く。

「……『解除』」

デスマネー。

ロア、いつきまーす！

『固定』の解ける気配がして、次の瞬間、突き抜ける痛みと共に、俺は華麗に宙を舞つた。
「あらあら、サナさんもやりすぎですよ。ちょっと赤いお肉が飛び出しちゃつてるじゃないで

すか」

セイラが呆れたように言う。

ねえ、本当に俺生きてるよね？ ってか、グロイな、おい！

本日二度目の回復魔法。なんて心地の好い温かさだらうか。セイラさん、ありがとうございます。

「お兄の、記憶が、消えるまで、私は、殴るのを、やめない」

「サ、サナさん、ロア先輩がもう虫の息ですよ！」

慌ててサナを止めるユーニャ。

なんだか、また一段と聖域がやかましくなりそうだ。

「それで、あれが温泉。確か、一緒に依頼で温泉のある街に行つた時、ユーニャも気に入っていたよな？」

聖域を訪れたユーニャに、現状と一通りの設備を説明する。

「はい、あの時は外が寒くて、温泉は格別でしたね」

「俺もそれが忘れられなくてさ、せっかく広い土地があるからつてことで、つくつてしまつたわけだ。ここにはしばらく滞在するんだろう？ 存分に堪能していってくれ」

ユーニャは俺に会いに聖域へと赴いたわけだが、ここに住むことはないと踏んでいる。ユーニャはパンプフオール国で父親と二人暮らしだ。それに、ユーニャが長いこと家を空けられないのには

ちゃんと理由がある。

だから、せめて聖域に滞在している間は十分にもてなしてあげるとしよう。なんせ、俺の貴重な知り合いなのだ。

その時、ふと疑問が湧いた。

「そういうば、最後にユーニャと話した時、俺がここに行くつて伝えてなかつたよな？ 偶然で来られる場所じゃないんだけど」

「実は私はサナさんを訪ねてきたつもりでして。そしたら、ロア先輩がいてびっくりしました」
どうやら、サナがユーニャに行き先を教えていたようだ。サナは兄に会いに行くとだけユーニャに伝えたようだが、まさかのその兄が俺のことだつたというわけだ。

「何かあつたら助けになるから、いつでも気軽に訪ねるといいと言つてもらえて。お言葉に甘えるつもりでした。もちろん、サナさんにも会いたかつたですし」
「魔素の森の奥深くつて、気軽に来られる場所じやないんだけど……サナの奴、ここが人類圏の外側だつて忘れてないか？」
呆れる俺にユーニャは苦笑いを零す。

サナにとつて、魔素の森は人類圏の森林と大差がないのだろう。S級指定の魔物でもない限り、最弱の魔物であるスライムを一捻りするのと一緒だ、と日頃から言つているくらいだし。

「そうですね。私もサナさんの言つことは半信半疑でした。でも嘘を吐くような人でもないですし。

S級指定の危険地帯にいるサナさんのお兄さんって、さぞお強い方なんだろうなと思つていきましたが、ロア先輩なら納得ですね」

「言つておくけど、この聖域には俺よりも強い人たちはたくさんいるからな」

「そうなんですか!? でも、どうしてこんなところに皆さんで住んでいらっしゃるんですか?」

それは俺が知りたいくらいだ。一人で慎ましやかに暮らすつもりだったのに、いつの間にか、もう集落と言つていいくらいまで発展してしまった。

「……いや、本当にね。俺も謎なんだよ。そりや、他に居場所がない奴もいるんだけど、そういう奴もなぜかここに住み着くんだよな。周囲には街も村もない、一步聖域の外に出ればA級以上の魔物がわんさか。とにかく変な人たちの集まりなんだよ」

そう言つて首を傾げる俺を見て、ユーニヤが小さく微笑む。

「私には、なんとなく理由が想像つきますけどね。まあ、でもそれが分からぬのが、ロア先輩らしいですね」

「えつ、どういうこと?」

「いえいえ、これを教えるわけにはいきません。あつ、サナさん!」

ちょうど家中での作業を終えて出てきたサナに、ユーニヤが大きく手を振る。その仕草に俺はちょっとした違和感を覚える。

愛嬌あいきょうのあるユーニヤだが、誰に対しても一步引いて話す癖がある。幼くて可愛らしい見た目に反

して、中身がとても大人びているのだが、サナを前にすると、ユーニヤはまるで年相応の少女らしくなるのだ。

見るからにサナもユーニヤに対して心を開いていそうだし、パンプフォール国で一体どんな出会い方をしたのか、随分と気になるところだ。

何より、人付き合いの苦手なサナに、たとえ一人でも友達ができたことにお兄ちゃん感激です。

「友達が少ないことを心配してたけど、こんなに素敵な友達ができる良かつたな」

俺はサナの肩に手を置き、しみじみと言つた。

「お兄も友達なんてほとんどいない」

「ヴァッ……」

サナの渾身のカウンターが飛んで来て、思わず小さな呻き声うめきごゑが漏れる。

「ユーニヤ、一緒に温泉入ろう。色々、話を聞きたい。あと、お兄の前で言っちゃ駄目なことも教えていいといけない」

サナがユーニヤにそう話しかけた。

「? それって、サナさんがお兄さんのこと、だいす——」

サナがユーニヤの口を慌てて塞ぐ。

ユーニヤがいると、サナの無表情がやたらと剥がされていくな。ユーニヤが何を言おうとしていたのか気になるところではあるが。

サナはどうしてか俺をねめつける。

「お兄、鼓膜^{こまく}が弾け飛ばされるのと、自らここから去るの、選んでいい」

「物騒なこと言うな……分かつてると、友達同士水入らずで温泉に入つてこい。お湯は俺が張つておくからさ」

やれやれ、サナのツンツンは今日も健在だ。たまにはテレてくれてもいいと思うんだが、年頃の妹というのは中々難しい。

話を切り上げようとする俺を見て、ユーニヤが口を塞ぐサナの手を退ける。

「サナさん、ちょっと待つてください。温泉の前に、ちょっとロア先輩に相談があつて」

ユーニヤの発言に、俺はびたりと身体を固めた。

俺は知つている。聖域を訪れる人は、もれなく厄介な問題も一緒に連れてやつてくるということを。そして、その度に俺のスローライフが妨害されることも――

ユーニヤは続けて話す。

「ちょっと、困つてることがあるのでパンプフオール国についてきてほしいんですけど……この前置き、断れるはずがない……」

俺は心中で大きなため息と共にそうひとり言^{ひとりごと}ちた。

ユーニヤが聖域を訪れた四日後、俺はユーニヤ、ユズリアと共にパンプフオール国へ向かう馬車

に揺られていた。

久しぶりに見る人類圏の景色がやけに懐かしく感じる。同時にちょっと聖域に帰りたいと思つてゐる自分がいる。それほどまでに、結局、俺はあの聖域での慌ただしくも賑やかな生活を気に入つてゐるということだろう。

トンツと右肩に重さがかかる。見れば、いつの間にかユズリアが浅く寝息を立て、その頭を俺の肩に乗せていた。

本当、サナとじやれ合つてゐる時でなければ、貴族のお嬢様という雰囲気が隠せていない。本人に言えば怒るのだろうけど、冒險者の服装よりもドレスが似合いそうなのがユズリアだ。穏やかな気候に、俺は欠伸^{あくび}を噛み殺し、左隣のユーニヤを見やる。

相変わらず、行儀が良い。今は俺たちしか乗客がいないというのに、ピンと背筋を伸ばし、両手を膝の上に置いていた。

「なあ、そろそろ相談とやらの詳しい内容を話してくれてもいいんじゃないか?」

そう、俺はまだユーニヤが持ちかけてきた厄介ごとの匂いがする件について、詳しくは聞かされていない。ただ、一緒にパンプフオール国に来てほしいと言わされたまでだ。

俺も近いうちに一度、行かなければならない用があつたので、特に断るつもりはなかつた。

ちなみに何やらユズリアも俺とパンプフオール国に行く理由があるようで、そちらに關しても俺はなんも説明を受けていない。

「そ、そうですね……あ、えつと。ううん……」

ユーニヤの眉が困ったように垂れる。そして、ユーニヤはすやすと寝ているユズリアを一瞥した。

「ロア先輩とユズリアさんはその、本当にこ、恋人とか、夫婦というわけではないんですね？」
訥々とした物言いでユーニヤが尋ねる。

「一体、なぜ今そんなことを聞くのだろうか。

「ユズリアはフォーストン家のご令嬢なんだよ。俺なんて身分不相応だ」

「そうですか……では、やはりロア先輩にお願いするほかありませんね。私には他に当てなどあります」

ユーニヤがすうっと息を吸い込み、続ける。

「ロ、ロア先輩。少しの間だけでいいので、あ、あの、私の……こ、ここ、恋人になつ——」

「よろこんで！」

「……えつ？ あの、まだ最後までお話しで——」

「よろこんでお引き受けしますツ！」

大丈夫だ。ユーニヤの年齢は確かサナの一つ下。つまり、こんな可愛らしい見た目だけれど、ちゃんと成人しているのだ。犯罪にはならない。

ああ、燐々と降り注ぐ陽光が俺とユーニヤを祝福しているようだ。ありがとうございます、

陽光神様。

瞬間、右足にのしかかる重さを感じた。

「……おい、ユズリア、足を踏むんじやない」

俺とユーニヤの楽しい時間を邪魔するように、いつの間にかユズリアが俺の足を踏みつけていた。

「なーんか、楽しそうなお話してますねー」

「……俺は一夫多妻も悪くないと思うん——イダダダツ!?」

ベキツと床板が音を立てて。

『身体強化魔法』を使うのは反則だろ？

俺の足を踏みながらユズリアが言う。

「私も別にそれには反対というわけじゃないけど、第一夫人は私だからね！」

「いや、今そんな話をてるんじゃなくて……」

「あの、ご迷惑なのは承知しています……ユズリアさんが駄目だというのであれば、私も大人しく引き下がります」

そう言つてしまんぱりと俯くユーニヤ。その瞳には焦りと動搖が窺える。頼みごとの内容もそ
うだが、実にユーニヤらしくない。そもそも、わざわざ俺を探し出してまで頼みごとをするなんて、
一人で溜め込みがちなユーニヤにしては珍しいことだ。

「なあ、ユズリア。俺からも頼むよ。冗談とか、おふざけをするような奴じやないんだ」

頭を下げる俺に、ユズリアはきょとんと目を丸くし、ややあつて大きくため息を吐いた。

「あのね二人とも、私のことをなんだと思ってるわけ？ 駄目なんて一言も言つてないでしょ？」
……確かに言つていない。それどころか、冗談で言つた一夫多妻制について肯定されたことにも驚きだ。

「ほ、本当ですか!?」

安堵したような声色で、ユーニヤが前のめりになる。

「もちろん、事情は話してもらうわよ？」

「は、はい！」

ユズリアの言葉に大きく返事をするユーニヤ。

やれやれ、一時はどうなることかと思つたけど、話がまとまつて一安心だ。だから、早くその足をどかしてもらえませんかね、ユズリアさん。

その時、遠くに魔物の気配を察知した。外を窺うと、遠くの空から怪翼鳥の群れがこちらに向かつて飛来していた。

「ひいつ!?」

御者が悲鳴を上げる。

無理もない。怪翼鳥の群れなんて災害のようなものだ。襲撃されれば、それこそA級冒険者のパーティが三組は必要。それでも、被害を全く受けないというのは難しいだろう。

しかし、実際のところ、旅の途中で馬車が盗賊に襲われることはあれど、魔物に襲われることはほとんどない。大抵、こういった街道を行き来する乗り物には気配を隠す隠ぺい魔法と、魔物が近づかなくなる魔除けの魔道具が備わっているからだ。もちろん、馬車から降りなければという制限付きだが。

「ちょうどいい。ユーニヤ、いつもの頼む」

「はい、ロア先輩！」

俺とユーニヤはそそくさと荷物をまとめめる。

「えつ!? な、何してるの二人とも？」

「ユズリアも早く準備してくれ。降りるぞ」

ユーニヤが我先にと馬車から飛び降りる。その様子にユズリアは困惑気味だ。俺とユーニヤが冒険者時代に利用していた移動方法について、事前に説明しておけばよかつたかもしれない。

「ちよっと、お客様さん!? 危ないですよ！」

俺たちの様子を見て、御者に注意されるがお構いなしだ。

ユーニヤがわざと魔力を大きく放出させる。すると、怪翼鳥の群れはすぐさまユーニヤに意識を向け、空を炎で焦がして威嚇した。

「あわわッ!? 怪翼鳥にわざと存在を気付かせるなんて、あの少女どうかしてるんじゃないですか!?」

御者の言い分はもつともだ。A級指定の魔物の群れを小馬鹿にするなんて、どう考へても馬鹿な行動だ。

「御者さん、ありがとう。ここまででいいよ」

料金は次の街までの分を前払いしてあるし、感謝を告げる挨拶だけ済ませて俺も馬車を降りる。

「ここでいいって、まだ次の街まで何日もかかりますよ！ それに怪翼鳥の群れが……！ ああ……もう駄目だ……」

カチツカチツと顎を鳴らしながら、猛烈な速度でこちらへ向かつてくる数多の怪翼鳥。

「私が全部やつつけるわ！」

ユズリアが細剣を構え、足に力を込める。

「あ、ちよつ！」

俺の制止も虚しく、ユズリアは止まらない。

「行くわよ……ッ！ つせい！」

……すまん。

そう思いながら、俺はユズリアの靴と地面を『固定』する。

勢いをつけてばねのように飛び立とうとしていたユズリアは、足を伸ばし切った状態のまま、その場で一瞬停止。その場から離れない足のせいで体勢が大きく崩れ、そのまま地面に向けて顔から落ちる。

「ふぎゅつ!?」

なんか、懐かしいな、この光景……。

ユズリアと初めて出会った時から、もう数か月。俺のスローライフは理想からかけ離れていくばかりだ。

「ちよつと！ 何するのよ！」

地面上ぶつけた鼻を押さえながら半ばそになるユズリアに、もう一度心の中で謝る。でも、ユズリアなら一匹残らずなぎ倒してしまおうからな。

「いいから、ユーニヤに任せておけよ。あいつだって、S級冒険者になつたらしいんだからさ」「もつとも、これくらいの魔物の群れであれば、以前からユーニヤには余裕だったが。ユーニヤ、やつてくれ」

「はい、ロア先輩！」

魔法陣がユーニヤを中心として瞬く間に地面に広がる。

「ねえ、ユーニヤちゃんはどんな魔法を使うの？」

大人しく細剣を鞘に収めたユズリアが俺に尋ねる。

「まあ、見てろつて。きっと、ドン引きするぞ？」

ユーニヤの奴、可愛い顔してやることえげつないんだよな……と思いつつ、首を傾げるユズリアに、俺はそう返した。

怪翼鳥は、深緑の龍のような鱗に身を包み、鋭いかぎ爪と触れるものを溶かす息炎で、数え切れない街や村を焼き尽くしてきた魔物だ。

何十匹もの群れが、ユーニャ目がけて一斉に襲いかかる。

「行きますっ！」

ユーニャはかけ声と共に、魔法を発動させる。魔法陣が一度、大きく広がつて消え去る。

そして、束の間の静寂。

「ねえ、何も起きないわよ？」

ユズリアがハラハラした面持ちで再び細剣の柄を握りしめる。

「何言つてるんだ。もう魔法は発動しているぞ？」

「えつ……？」

怪翼鳥の群れが空中でぴたつと動きを止める。奴らの獲物であるユーニャを捉える、その大きな目が妙に虚ろだ。

そして、次の瞬間、一匹の怪翼鳥が隣の怪翼鳥に噛み付いた。それを皮切りに、怪翼鳥がそのままの自慢のかぎ爪で、鋭い牙で、互いに傷付けあう。

もう、ユーニャに意識を向ける怪翼鳥は一匹たりとも存在しなかつた。

「互いに殺し合つてるの……？」

ユズリアは依然、何が起きたのか理解できないらしい。

「ただの『混乱』だな」

「いやいや、そんなわけないでしょ。怪翼鳥相手に『混乱』なんて、一瞬動きを止める程度ですぐに打ち消されちゃうはずよ？」

「まあ、そうだな。だけど、あれは正真正銘の『混乱』だ」

『混乱』は相手の思考をごちゃごちゃにして行動に障害を起こすことが可能になる。しかし、ユズリアの言う通り、ちょっとした衝撃や痛みで簡単に効果が解けてしまう。

ただし、ユーニャの使う『混乱』は命を脅かすような強い苦痛でないと解けないようになつているのだ。

「一体、どういうことなの……？」

ぶつぶつと色んな予想を立てているユズリア。その傍らで、俺は怪翼鳥を一匹ずつ観察していた。さて、どいつが良さそうかな……

奥を飛んでいた一際大きなあいつが良さそうだ。ユーニャにどの個体にするか伝えないと。

空中では木々や地面のような『固定』がかけられるものがない。代わりに、傷付け合つていた怪翼鳥の弾け飛んだ鱗が、お目当ての個体にぶつかった瞬間、鱗と怪翼鳥の胴体を『固定』。これでどの個体にするかを示すことができる。

「よし、ユーニャ。手つ取り早くやつちやつてくれ」

俺の合図にユーニャは嬉々として微笑むと、次の魔法を展開した。もう一度、ユーニャを中心

魔法陣が瞬く。

一粒の紫色の液体が、魔法陣から弾丸となつて射出される。その正体は、毒の弾丸だ。

もう一度、魔法陣が輝く。すると、毒の弾丸が一瞬にして数えきれないほどの数に分裂し、雨のように怪翼鳥^{ワイルドバード}の群れに降り注ぐ。

ぴしゃつ、ぴしゃつ、と全ての怪翼鳥に毒が散布された刹那、それまで激しい争いをしていた怪翼鳥たちが、今度は突然呻き声を上げてもがき苦しむ。

じたばたと翼をはためかせる怪翼鳥たち。並みの攻撃ならば弾いて傷一つ付かない鱗がどろりと溶け落ち、肉が剥き出しになつていく。やがて、その肉も煙を上げてぶくぶくと泡を立てる。

「う、うわあ……」

これには流石のユズリアも引いているようで、片頬をびくつかせていた。毒の痛みで何匹かは最初にかけた『混乱』^{コンフューズ}が解け、最後の力を振り絞つてユーニヤに向けて飛んでくる。

「あわわっ……」

ユーニヤは愛くるしい間抜けそうな声を上げ、さらに魔法を発動する。

瞬間、眼前に迫る怪翼鳥たちの全身が大きく痙攣し、そのまま地に落ちる。ぴくつ、ぴくつ、と震える怪翼鳥は苦しむこともできずに、ユーニヤの魔法——『猛毒』^{ボイソン}によつて骨の髓まで溶けた。気が付けば、何十匹といった怪翼鳥は姿を消し、俺が『固定』をかけた怪翼鳥だけが、未だに

『混乱』^{コンフューズ}によつて見えない敵と宙で戦いを繰り広げていた。

「ふう……緊張しましたあ」

ユーニヤが魔法杖を両手に抱え、俺のもとに駆け寄つてくる。

「よし、魔法の腕は落ちてないみたいだな」

無意識にユーニヤの頭を撫でる。すると、ユーニヤは頬をだらしなく緩ませ、まるで嬉しくて尻尾を振る子犬のようにご満悦だ。

やつぱり、俺はユーニヤと一人で暮らすことになるかもしれない。

だつて、無理だろ。こんな可愛い少女がこの世に存在していく、こんなにも俺に懷いているのだからッ！

「ね、ねえ、もしかしてユーニヤちゃんつて……いや、でも、この威力はおかしいか……」

液体と化した怪翼鳥を覗き込んだユズリアが、俺に質問しようとしたが、その内容に疑問が浮かんだようだつた。

ユズリアが疑問に思うのも無理はない。これはユーニヤにしかできない戦法なのだから。彼女の固有魔法を知らなければ、理解のしようがないというものだ。

俺は自身の固有魔法の説明を促すように、ユーニヤの背をぽんと押す。

「あ、はい。えつと、私は状態異常系魔法が得意でして」

そう、ユーニヤは世にも珍しい戦い方をする冒險者なのだ。攻撃魔法は何一つとして覚えていな

い。麻痺や毒を始めとする多くの状態異常系魔法や、相手の視界を奪う『暗闇』のようないわいの行動阻害系魔法各種をとにかく重ね合わせて戦うのだ。

しかし、それだけではS級の冒険者には到底なりえない。状態異常系魔法も、行動阻害系魔法も、魔物に対する効果はさほど高くない。せいぜい、瞬間的に身体の自由を奪うか、動きを鈍らせる程度のものだ。まして、それだけで倒し切ることはほとんどないと言つていい。それらの魔法は攻撃魔法とは違い、所詮は支援魔法なのだ。

ただし、ユーニャをS級冒険者まで導いた固有魔法がある。

それがユーニャにしか使えない魔法——『增幅』だ。状態異常などの効果を文字通り増幅させることのできる魔法。ユーニャ唯一の強化魔法でもある。

一見、陰湿に思える戦い方も、ここまで突き詰めるとただただ圧倒される。

「ん？ どうかしましたか、ロア先輩？」

あどけない笑みで俺を見上げる少女。

久しぶりにその戦いつぶりを目の当たりにして、俺は改めて思う。

『增幅』によって後方での支援を主とする冴えない支援職になることなく、ユーニャは相変わらず一人でA級指定の魔物の群れすらも躊躇する、無自覚系クロテスク少女なのだと。美しい華には毒があるように、可愛い少女には猛毒があるのだ。

さて、それではパンプフォール国へのショートカットを行つていこうと思う。
あんまり遅くなると、黙つて置いてきたサナが追いかけてきてしまう気がする。あいつがいたら、話がややくなつて仕方がないからな。

まずは一体だけ残しておいた怪翼鳥の『固定』を解除してユーニャの魔法が効くようにしたところを、彼女の、対象を麻痺させる魔法、『麻痹毒』で地に落とす。

その後、ユーニャの、対象の思考を奪い、操る魔法、『洗脳』をかけることによつて、彼女の意のままに操ることができた怪翼鳥の完成だ。仕上げとして、俺は怪翼鳥の頭に触れ、『洗脳』が解けないように意識を『固定』。こうすることによつて、『洗脳』がずっと続くようになる。

さつそく俺は怪翼鳥の背にまたがり、ユーニャに手を貸す。

「ありがとうございます」

身体の小さなユーニャでは、巨大な怪翼鳥に乗るのも一苦労だ。成人しているというのに、コノハより少し背が高い程度。是非、そのまま成長しないでいただきたい。いつまでも、母性をくすぐる容姿でいてくれると幸いです、はい。

「ん、ユズリア？ どうしたんだ、早く乗れよ」

未だ、呆気に取られるユズリアは、俺の問いかけに弾かれたように顔を上げた。

「いやいや、これつて『使役』じゃないわよね？ ……大丈夫なの？」

ユズリアの言う『使役』とは、契約を結ぶことで魔物を手懐けられる魔法のことだ。『使役』

を行使する人間の魔力量などによつて契約できる魔物の等級が変わる。契約が可能な目安としては、その冒險者の等級の一つ下の等級の魔物だ。例えば、A級の冒險者ならば、B級程度の魔物が『使役』^{【ティーム】}によつて契約ができる。しかし、さほど強力ではない魔法ということもあつて、人気はありません。

しかも、怪翼鳥^{【ワイルドバード】}のようなA級指定の魔物と契約を結べるのは、それこそ『使役』^{【ティーム】}をメイン魔法にしているS級以上の冒險者に限る。

百年以上前の大昔には、どんでもない強さの『使役』^{【ティーム】}使いの冒險者がいたらしいが、現代では全然使われていない魔法だ。

その冒險者は、噂ではあの魔族や龍を倒すようなどんでもない冒險者だつたようなので、もしかしたら『使役』^{【ティーム】}はロマンがあるのかもしれない。

「大丈夫ですよ。ロア先輩の魔法を信じてください」

ユーニヤが揚々とユズリアに言う。

でもな、ユズリアが言いたいのは多分、俺の魔法ではないと思うぞ？

「俺たちは今まで、遠方の依頼はこうして移動してきたんだ。だから、途中で空から落とされるとかそんな心配はないぞ」

それに、俺の『固定』があれば空から落ちたとて無傷だから、さほど問題ではないと思うが。

「それならいいのだけど……」

そう言いながら、ユズリアがすっと俺に手を伸ばす。

「……何してんだ？」

「いや、手貸してよ」

「……？」

ユズリアなら一人で乗れるだろうに。変な奴だ。

仕方がないので、俺はユズリアに手を貸した。

「よし、じゃあ行こうか。一週間もあれば、パンプフォール国に着くはずだ」

山々を越えて上空を移動したとしても、やはりそれくらいはかかるつてしまふ。

聖域とパンプフォール国の距離がとても離れていたことを思い出し、随分と遠くで生活していたんだなど感じた。

そんなこんなで、予定通り一週間でパンプフォール国に辿り着くことができた。馬車のように尻が痛くなることもない。本当、ユーニヤのおかげだ。

近くの森で怪翼鳥を空に放つ。ここまで連れてきてもらつて殺してしまうのは、流石に魔物といえ気が引ける。

『洗脳』^{【コドロール】}で人を襲わないように言い聞かせ、それを『固定』して解放してあげることにした。

「うう……お別れだね、ゴンザレス……」

ユズリアが名残惜しそうに怪翼鳥の背を撫でる。結局、一番この怪翼鳥に情が湧いたのはユズリアだったようだ。

それでもゴンザレスて……

ペツトを飼うことがあれば、ユズリアに名付けをさせるのはやめよう。

街は俺が出立してから、何一つとして変わっていなかつた。

それもそうか。だって、俺が冒険者を引退してから一年も経っていない。濃密すぎる聖域での日々のせいで、国を出たのがもう何年も前のことのように思える。

いや、おかしいな……怠惰な日々を送るはずだつたのに、なぜこんなに濃ゆいんだ……？

隣でユーニヤが俺の顔を覗き込んで首を傾げていた。

ユーニヤは俺が聖域に辿り着いてからの日々を知らない。だから、きっと俺たちが魔族を倒したと言つても、俄かには信じ難いだろう。

「それにしても、ユーニヤがS級になるのはもうちょい先のことだと思つたけど、案外早かつたな」

「早くロア先輩に会いたくて、依頼量を倍近くに増やしたんです」

「……やっぱり、結婚しよう。恋人なんて期間、煩わしい。

よし、目的変更。今日中に式場を探すとしようじゃないか。

「あ、待てよ……やっぱり、親御さんへの挨拶が先か……？」

「それにして、ユーニヤがS級になるのはもうちょい先のことだと思つたけど、案外早かつたな」

「まだ許可をもらつたわけじゃないしな。さて、それじゃあ、正装を買いに行きますか。

「そうですね。是非、お父さんに顔を見せてあげてください」

俺の発言を聞いて、ユーニヤがそう返した。

「そうか、そうか。そうだよな。うつかりしてたよ。まずは親御さんへの挨拶を……って、本当に？」

あれ、ガチの流れですか……？

「……ロア」

俺をねめつけるユズリアの視線がとても痛い。分かつてますよ、冗談ですやん。

ユーニヤとて、事情があるから俺に恋人役をしてくれと言つてきたのだ。そして、その理由もなんどなく予想は付く。俺はユーニヤの抱えているある事情を知つてゐるわけだし。

「ユーニヤ、もしかしてお父さんって……？」

俺が事情を聞こうとすると、それまで笑顔を絶やさなかつた少女の表情が一変し、目を伏せる。

「はい……きっと、もう長くないんだと思います」

ユーニヤの父親が病に侵されていました。そして、ユーニヤは父親の薬代を稼ぐために冒険者という道を選んだということも。

そして今、ユーニヤが冒険者を続ける意味が失われようとしている。

「お父さん、この前言つていたんです。私の幸せな姿が見たかったつて。自分のせいで私が辛い

日々を送っていると思つてゐみたいで

「それで、恋人役ね……」

ユーニヤの話を聞いて、ユズリアは納得したようだ。

「すみません……他に方法が思いつかなくて……」

嘘だとしても、最後にそんな姿を見せてあげたい。その一心で、ユーニヤは俺に恋人役を頼んだのだろう。

昔から色々と議論されるテーマではある。でも、俺は、嘘は美德になり得ると思う。

俺は父親も母親も既にこの世にいない。だからこそ、親孝行というものはどんな形であれ、するべきだと思う。失つてからそのことに気が付いても遅いのだから。

俺はユズリアを一瞥する。彼女も特に反論はなさそうだ。

「一旦、実家に戻つておくわね。私がいると話がややこしくなりそうだし。元々、私は実家に顔を出すためにここに来たからね」

ユズリアの言葉を聞いて、フォーストン家の本邸(ほんてい)はこの街にあつたなと思いつ出す。何か問題が起きたら、手を借りずに済むに越したことはないけど。

「ユズリアさんも、本当に迷惑をおかけします……」

ユズリアは申し訳なさそうにするユーニヤを、ぎゅっと抱きしめる。

「大丈夫よ。何かあつたら、なんでも言つてちようだい」

「……ありがとうございます」

ユーニヤもユズリアのおかげで少しは落ち着いたようだ。

「じゃあ、行くか」

一応、試したいこともあるし。

俺は鞄の中で、ひとつそりとあるものを握りしめていた。

ユズリアと別れてやつてきたユーニヤの家は、一般的な庶民区から少し外れたところにあつた。ここら辺はスラム街へと続く通りで、治安があまり良くないから、賃料は決して高くない。

「なあ、あまりこういうこと聞きたくないんだが、ユーニヤつてかなり稼いでたよな」

冒險者は有り体に言えば、かなり儲かる。それこそ俺でも、貴族の屋敷が建つくらいの莫大な額の借金を十年で返済できるくらい、一獲千金の職業だ。もちろん、低級でくすぶつていれば、稼ぎもぐんつと落ちるが、それでも普通の職とは比べ物にならない。命を懸ける仕事だから、当然とも言える。

ユーニヤは俺が引退する随分前から既にA級。依頼だつて、ほとんど日数を空けずにこなしていはづ。むしろ、多忙すぎて心配だつたくらいだ。

「まあ、そうですね。たくさんのお給金はいただいています。しかし、なにぶん薬代が高くて……」

冷静に考えてみる。

S級冒険者に比べて額が劣っていたとはいえ、A級は上から二番目の等級。報酬は一度で他の職の数か月分以上が相場だ。ユーニヤはそれを月に五件以上、ほぼ単独か、もしくは俺と二人でこなしていた。それだけ稼いでいて、生活に余裕を持てないほどの高価な薬なんて聞いたことがない。そうなれば、当然、浮かぶ疑問がある。

「冒険者になりたての時は払えていたのか？」

「はい。しかし、お父さんの病気の進行によつて薬の種類も変わるからって」

ユーニヤは伏し目がちに話す。

「そつか……」

そんなわけない。

心の内ではそう思つていても、今は断言できなかつた。俺に医療の知識なんてものは皆無だし、父親が危篤に陥つてゐる状況下でユーニヤに勝手な想像を告げるのは憚られる。

この世界は案外汚れてゐる。純粹な子供を騙す卑しい大人はたくさん存在するのだ。

才能を持つた子供たちを都合よく利用する手段など、いくらでもある。若くて分別がつかない段階で、選択肢が狭められてしまえば、子供たちはそれに縋るしかなくなつてしまふ。

そうやつて、正直者は搾取される。

「着きました。ここが私のお家です」

お世辞にも素敵な家とは言い難い一軒屋だつた。強風でも吹けば、トタン屋根が飛んで行つてしまいそうだ。

とてもじやないが、S級冒険者が住んでいるとは思えない。

中へ案内され、ようやく少し緊張してきた。冷静に考えたら、嘘とはいえ親御さんへ恋人として挨拶をするのだ。今さらながら、どうしたもんかと唸つてしまふ。

ユーニヤの家の内装は至つて質素だ。どこか、俺が昔に母親とサナと住んでいた田舎の家を思い出させる。

ユーニヤの父親は寝室のベッドの上で壁に背を預け、窓の外を虚ろな瞳で眺めていた。どうやら、ユーニヤと俺が来たことにも気が付かないらしい。

見るからに血色の悪い顔、やせ細つた身体。服にこびりついた血痕。ベッドの側の床頭台には力ビの生えたパンが食べかけのまま置かれている。

その光景を一目見ただけで事の重大さが伝わつた。

ユーニヤが父親の肩を優しく叩く。

「お父さん、帰つたよ」

娘の声に、ユーニヤの父親はようやく反応を示す。そして、その瞳がゆつくりとこちらを見る。

「……誰だ？」

俺を足先からゆつくりと顔まで見上げて一言、そう呟く。

「初めまして。えつと……冒険者をやっています、ロアと言います」

少し悩み、冒険者ということにしておいた。別に自主的に引退宣言しただけで、ギルドカードは返納していないわけだし、嘘は吐いていない。

それより、娘が連れてきた男が無職だなんて知られたら印象は最悪だろう。
「この前話した例の人でね。その、あの……お、お付き合いを……させてもらっているというか、なんというか……」

ユーニャにしては珍しく口籠もりながら、訥々と俺との偽の関係を話す。親に恋人を紹介するのだから、当然と言えば当然なんだろうか。

少しだけ、ユーニャの父親の瞳に力が入った気がした。じつと俺に向ける視線は、警戒とは違い、俺を見定めているような目つきだ。ややあって、ユーニャの父親は沈黙を破る。

「ユーニャ、茶菓子を買ってきなさい。お客様だぞ？」

「そ、そうですね。ロアせ——口、ロア……少し待っていてください」

俺が止める間もなく、ユーニャは顔を真っ赤にして逃げるように家を飛び出してしまった。

いや、この状況をどうしようと……

気まずい沈黙を終わらせてくれたのは、ユーニャの父親だった。ユーニャが出て行つた先を眺め、大きくため息を吐く。

「全く、不器用な子に育つたものだ。すまなかつたね、ロアくんと言つたか……」

「いえ、私の方こそ急とはいえ手ぶらで来てしまって、失礼しました」

ユーニャの父親は弱々しく笑う。

「いや、そうじゃない。娘の虚構のためにわざわざご足労いただいてしまつたことを詫びてているのだ」

「えつと……」

「自分の子供の嘘くらい、親にはすぐ分かる」「すみません……」

ユーニャの父親は苦しそうに咳き込み、床頭台に置かれたコップを震える手で持ち、中身の水を

半分ほど零しながら一気に呷る。

「わざわざ娘を外に追い出したのは、きみと少し話がしたかったからだ」「私に、ですか……？」

その瞳が俺をじっと見つめる。

流石に俺も悟った。この人は本当にもう長くない。

冒険者という危険な職業柄、今まで多くの人の死を見てきた。理由はそれぞれだが、緩やかに亡くなっていく人には共通する気配がある。全員、穏やかな覚悟を見せるのだ。自分のことは本人が一番よく分かるのだろう。差し迫る死への恐怖や不安を乗り越え、残された時間を大切に過ごすようになる。

ユーニヤの父親は震える身体で、ゆっくりと俺に頭を下げる。

「どうか、ユーニヤのことを——」

「待ってください」

俺はユーニヤの父親の言葉を遮った。元より、俺は勝手に覚悟を決めた人の遺言を聞き届けるつもりはない。

俺は鞄から小瓶を取り出す。ほのかに輝く蒼い液体が瓶の中で波を立てる。

「これを飲んでみてください。それで駄目なら、あなたの話を聞きます」

ユーニヤの父親は不思議そうに瓶を受け取った。中身はもちろん、聖域の泉の水だ。

正直、賭けではある。病は治癒魔法でも、聖水でも治すことができない。だから、これを飲んだところでユーニヤの父親の身体になんの影響も及ぼさない可能性の方が高い。それでも、やれることはやってみるべきだ。

ユーニヤの父親は俺を一瞥し、なんのためらいもなくそれを口に運んだ。

すると、ややあつてから、ユーニヤの父親の身体の周りに薄い光が広がった。内側から滲み出すようなぼんやりとした明かりが全身を包み込む。

そして、次の瞬間、俺は自分の目を疑つた。

「これは……」

ユーニヤの父親の体表から、禍々しい魔力が黒いベールのように少しづつ滲み出した。そして、

ユーニヤの父親の瞳には微かに光が戻り、血色もみるみるうちに良くなつていった。こ

薄い光の膜に溶けるようにそのベールが消えていく。

思わず息を呑む。

「なんだか、胸の苦しさが嘘のように晴れていく……」

そう言うユーニヤの父親の瞳には微かに光が戻り、血色もみるみるうちに良くなつていった。この黒いベールのようなものが、彼を餓んでいたものの根源だつたらしい。

あの嫌な魔力。確かに覚えがあった。

これは病なんかじゃない。呪いだ。

呪いを解いたからといって、衰弱しきった身体がすぐに良くなるわけではない。ユーニヤが戻ってきたのと入れ替わりで、俺は彼女に説明もせず、家を出た。

その足でギルドへと向かう。久しぶりに訪れた大きな建物に息が詰まる。

十年間、俺が足繁く通つた場所だ。その大仰な門を前に、様々なことが思い返された。正直、良い記憶の方が少ない。

初めてステップを頭から被つたのも、最後まで後ろ指を差され続けたのも、全部忘れようとして発つたはずなのに。結局、俺はまたここにいる。

一步目を踏み出す足が、やけに重たかつた。

「心の傷も泉の水が治してくれたら楽なんだけどなあ」

深く呼吸を整え、ギルドの門をくぐる。

開けた大広間には雑にテーブルが置かれ、奥には依頼の発注やら、素材の買い取りなどを行いう力ウンター。昼頃ということもあってか、思ったよりも人が少ない。これがあと少し遅くなると、依頼から帰ってきた冒険者や隣接する酒場の待合いでごった返すのだ。

今、ここにいる冒険者は昼から呑んだくれる人たちや、依頼を早くに切り上げた人がほとんどだ。そうは言つても、大きな街のギルドだから軽く数十人はいる。

中には俺の記憶に残る奴らもいた。カウンターから一番遠い席で屯する四人組の冒険者と目が合う。

刹那、心臓が早鐘を打つ。無意識に胸を手で押さえていた。

節々が痛む幻覚に囚われる。

彼らにはまだ俺が成人する前から、散々可愛がられたものだ。

向こうも俺の存在に気が付き、全員で顔を見合させて勢いよく立ち上がった。

いつそのこと、全員この場で『固定』して、見なかつたことにしてしまおうか。

しかし、俺の覚悟をよそに、彼らは俺の目の前まで走ってきて、次の瞬間、すさまじい勢いで頭を下げた。

「こんちはあーすっ！」

辺りに響く彼らの大きな声。

「はい……？」

俺を翻り続けた奴らがどんなでもない様変わりをしていることに、俺は酷く混乱した。

「お世話になつてます、兄貴！」

……なんだ、これ。

一人が腰を折り曲げ、低い姿勢のまま俺を見やる。その表情は酷く強張っていた。

「そ、それで、今日は姉御はどうちらに……？」

「姉御……？」

誰だ、それ？ 人違ひしているんじゃないのか？

俺の疑問に冒険者の一人が答える。

「はい、サナの姉御つす！」

「……あ、はいはい。そういうことね」

ゼーんぶ理解しました。そういうや、聖域に来る前にこの街へと寄つたって言つてたつけ。

サナの奴、一体どんなことをしでかしたのやら……

サナが初めて聖域を訪れた時の会話が思い起こされる。

『お兄の悪口言つた人たち、全員星屑にしてきた』

『ちよつと、礼儀を教えてきただけ。大したことはしていない』

いや、何をしたら荒くれ者たちがこんな風になるんだよ。

立ち読みサンプル はここまで